

## 第六節 関ヶ原の戦と郷土

黒田孝高・長 黒田孝高（如水）は、既に朝鮮出兵中から、石田三成と不仲であったという。文禄二年政、家康方へ（二五九三）、孝高と浅野長政が囲碁中に、石田ら三奉行などが対面を申し入れたが、二人

はこれを持たせて、囲碁を打ち続けたので、三奉行は怒って席を立ち、秀吉に讒言ざんげんしたという。このこと以来、孝高は豊臣秀吉の不興を買った。

こうした関係から、子息長政も加藤清正・福島正則ら反三成派として、徳川家康に接近し、上杉景勝討伐に当たっても、家康に従って伏見を出立した。長政が何千人を率いて宇都宮まで下ったかは不明である。石田三成が近江佐和山で挙兵したため、家康の陣所小山に引き返し、軍議に加わって、尾張清洲まで、家康の先手として上り、福島正則を家康方に繋ぎとめ、清洲城に家康を入城できるようにし、岐阜城を攻略して、慶長五年（二六〇〇）九月、関ヶ原に進出した。

九月十五日、小早川秀秋を説得して家康方へ内応させ、吉川広家をも寝返らせて、関ヶ原の合戦を家康方の勝利に導いた。

豊前中津城の留守を預かった黒田孝高は、留守の兵が少ないため、領内に触れ回し、蓄えていた金銀を与えて兵を集め、身分の貴賤を問わず、兵として使える者三六〇〇余人を召し抱えたという。

そのころ、前の豊後の国主であった大友義統が、大坂で毛利輝元の下知をもって、本国を還補げんぽされ、豊後へ下向してきた。

**黒田孝高と石垣原の戦** 九月九日、孝高は、豊後へ向かって中津を出発した。その勢は八〇〇〇余人、孝高の本陣は一〇〇〇余人、都合九〇〇〇余人であったという。

孝高は豊後高田の竹中伊豆守重信が家康に同心したので、留守を預かる子息の采女正重次の兵を加えて、赤根嶺に陣をとった。それから、兵三〇〇〇余を分けて、細川忠興の家老松井佐渡らの籠もる木付城が大友家の宗像掃部ら数千に攻められ、危地に陥っているのを救援させた。自分は富来城とみきへ押し寄せた。この城は石田三成方の垣見和泉守の居城で、和泉守は美濃大垣にいて、兄の理右衛門が留守を預かっていた。ここは後で攻めることにして、安岐城へ進んだ。この城も城主熊谷内蔵允が大垣城にいて、一族の外記たけらが留守を預かっていた。ここも後回しにして、実相寺山に陣を進め、大友義統の陣立石山と対峙たいじした。

九月十三日、大友方は吉弘加兵衛統幸を大将として、石垣原に進出したが、黒田方との激戦で、吉弘統幸が戦死する敗北を喫し、義統は孝高の説得によって降伏し、身柄を常陸国へ移された。

九月十六日、安岐城へ引き返して包囲した。この日、熊谷内蔵允は美濃大垣城で戦死した。九月十九日、安岐城は孝高の説得によって開城した。

九月二十三日、富来城へ押し寄せ、説得したが、同心せず、十月二日、垣見和泉守が大垣城で戦死したことを知って降参した。

その後、孝高と加藤清正は石田三成方についた城の受け取りに動き、白杵・日田の隈城・玖珠の角牟礼・

豊前小倉・香春・久留米・柳川の諸城を請け取り、鍋島直茂・立花統虎を説得し、日向宮崎城を攻略したのち、薩摩境に出陣し、島津領へ攻め入ろうとしたが、島津氏の降伏で帰国した。